HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラジル移民への栞 : 横浜・神戸・船上の移民教育
Author(s)	眞崎, 睦子
Description	大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」
Relation	言語の接触と混交 : 日系ブラジル人の言語の諸相 = Language Contact and Admixture : Sociolinguistic Perspectives on Brazilian Nikkey (大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」: 大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002・2003年度報告書 = Osaka University the 21st Century COE Program Interface Humanities Research Activities 2002 2003 ; 5), pp.110-123, 第2部「日系ブラジル人をとりまく日本社会」第1章
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32591
Type	report
File Information	masaki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第1章　ブラジル移民への栞（しおり）

―横浜・神戸・船上の移民教育―

ブラジル移民への栞（しおり）— 横浜・神戸・船上の移民教育—

横田睦子

日本からブラジルに渡った方々の故郷でもなければ、彼らの新天地であったブラジルでもない、中間的な空間がある。故郷を離れた彼らが移民船に乗船するまでを過ごした横浜や神戸といった港町、そして目指すブラジルの港までの船の上である。これらは彼らが移民教育・異文化教育を受けた「場」であった。日本からの大量の移民労働者の渡航先がアメリカから南米へと変わる時期に移民教育施設として開設された横浜講習所、続いて、1928年に神戸に設置された国立移民収容所、そして45日間という長い船上生活 —ブラジルへと向かう人々はこれらの空間で新天地に臨むまでの時間をどのように費やしていたのだろうか。この章のタイトルに用いた「栞（しおり）」とは、今では読みかけの本などにはさむ紙片であるが、もともとは「枝折り」と記し、山道などで旅人が後進のものが迷うことがないようにと木の枝を手折って道しるべとしたものである。この意味を踏まえて、ブラジルを目指した人々が実際に手に取った出版物としての栞（リーフレット、小冊子類）、そして彼らが「道しるべ」と仰いだ移民教育を「栞」と考える。日本を離れる彼らにどのような情報が与えられていたか、同時に、国内の識者たちは彼らにどのような情報を与えていたかを紹介し、分析を加えることが本章の目的である。横浜、神戸、そして移民船上の人々がブラジル上陸前に手にしたであろう有形無形の栞から、新しい地での回生に賭けた彼らの異文化適応への姿勢を読み取ってみよう。

前史 —ブラジル行きの始まり—

日本から海外への渡航が許可されるようになったのは鎖国令が解除された1866年以降のことである。在留外国人に雇われていた日本人の海外渡航が認められ、これが雇用移住の原形となった。このような移住の多くは過酷な労働と劣悪な環境などにより悲惨な結果と終わっていた。この背景には当時まだ世界的に名残のあった奴隷制度がある。アメリカが南北戦争の後に奴隷制度を廃止したのは1863年、本書の視界にあるブラジルで奴隷解放が実現したのは1888年だったのである(注1)。日本からの本格的な人口の移動、移民が始まったのは明治維新以後であり、丁度この時期と重なっている。海を越えての目的地は北海道、樺太、朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア諸

国、そして南北アメリカであった。

明治元年、無許可のままハワイに渡った153名の「元年者」と称される人々がいた。しかし労働契約終了前の帰国者、3名の自殺者が出たことなどが重く受けとめられ、この後の組織的な移民は禁止されている。これら初期の辛酸を舐めた人々にもし十分な情報、例えば移民教育、異文化教育が与えられていたならば結果は変わっていたのではないだろうか。後年、日本政府はオーストラリアへの短期契約移民が成功したことを機に海外移住への姿勢を緩和させることになる。明治維新以降の社会変動により国内の多くの人々が社会的な基盤を失っていたこともこれに拍車をかけることになった。特に土地制度の改革と商品経済の発達と浸透は農村部の過剰人口を生み出す要因となっていた。このような国内事情は職無き民の都市部への移動はもちろんのこと、海外への移民という選択の十分な下地であった。1885年にはハワイ政府の強い要請のもと945名という大量の官約移民が海を渡り、その高い賃金水準と初期の移民から伝えられる情報によりハワイ行きを希望するもの、そしてハワイよりも賃金水準が高いとされるアメリカを目指すものは急増したのである(注2)。

しかしその後、急増する日本人移民に対するアメリカ社会の反応は、日露戦争後急速に日本排斥、いわゆる排日の様相を帯びるようになった。日露戦争中、世界の同情を集めていたアジアの小国日本の勝利の瞬間から、各国が日本に警戒の念を抱くようになったのである。一方、日本政府は日本人移民がアメリカで醜業を営み恥をさらしている、などの政府関係者の報告に、迅速に自主的な移民制限を行った。これが1908年までに日米両国間で合意に達した「紳士協約」である。ブラジルへの最初の大量移民を乗せた笠戸丸が神戸港を出たのがこの1908年であることは決して偶然ではない。そして、日本で行われた移民教育の講習内容に伯剌西爾（ブラジル）という国名や葡萄牙語（ポルトガル語）講習の文字が登場するのも、海外に新天地を求める人々がその行き先を北米から南米へと変えるこの頃なのである。

日本移民協會横濱講習所

吉永さんへの手紙

1917年（大正6年）のある日、海外雄飛を夢見る吉永操義さんのもとに次のような手紙が届いた(注3)。

> 拝啓　今度貴下の海外旅券を御取りになつた事を貴縣廳から承りました
> 誠に御目出度うお祝ひ申上げます。定めて近い内に鄉里を御出發の事と存じますがその支度は一體どうすれば一番よいのでしよう、又旅費はどの位ひ、心配になる横濱出帆の時の

學力試驗や、身體檢査はどうすれば合格するのでしょう、船中の心得や、上陸の時の心得果ては米國移民官の訊問や學力試驗にはどう答へなければならぬのでしよう。又外國へ行けばその國の言語や、衛生法、着物の着方から、髪の結方、便所に行く事、寢床の用意から、湯に這入る事、料理や御掃除等に至るまで皆な日本とは丸で違います。外國へ行つて恥を掻かぬやうに豫め準備して行く事が大切です。日本移民協會横濱講習所では海外へ出る人に總て無料で之等必要な準備をして差上げます。横濱から乘船の一週間前に御出になつて講習を受けらるれば立派な資格が出來るのです。講習所は外務省の特別補助や全國各縣廳の後援で昨年四月に開校したのですがもう今年の十月で三千名近くの卒業生が出ました。卒業した人は皆な渡航後成績がよいのです。横濱から乘船なさるならば横濱に着き次第早速入學なさい。若し長崎、神戸から乘船なさるならば舩が横濱港へ着いたならば直ぐ御出でなさい夫等の人には又特別に早成的の講習を致します。

写真1　横浜講習所（1916年）
（提供：財団法人日本力行会）
横浜講習所開設の年に撮影されたもの。
女性の姿も見える。

講習所は講習の外に總て海外渡航者の味方となつて渡航上の事はどんな御相談にも應じますから遠慮なく御問合せ下さい喜んで御返事申します

講習所に來るには横濱櫻木町驛で下車して、辨天橋を渡つて眞直ぐに進みますと突當りに三階の大きな建物がありますから直ぐ判ります。講習所は貴下が一日も早く入學なさることを待って居ます。

大正六年　　月（空欄のまま）　　日

横濱市本町五丁目七拾壹番地
日本移民協會横濱講習所

吉永操義　殿

この手紙の冒頭部分から、差出人が吉永さんが籍を置く県庁から吉永さんが旅券を取得したという情報を得ていることがわかる。このような手紙は海外での労働を目的とする旅券取得者に広く届けられていたのである。この手紙の差出人、「日本移民協會横濱講習所」こそ、海を渡る人々

に移民教育を行っていた「場」である。設立は文中からもわかるようにこの手紙が届けられた前の年、1916年（大正5年）であった。

日本力行会と永田稠

日本移民協會横濱講習所（以下、横浜講習所）の設立に尽力し、初代所長を務めたのは日本力行会二代目会長、永田稠であった。日本力行会は1897年（明治30年）一人の牧師、島貫兵太夫が東京労働会の名で始めた組織である。自らの苦学体験をもとに貧困の救済の対象を苦学生に求め、自宅をこの組織の場として開放してのスタートであった。やがて島貫は移民奨励の世論も手伝って、苦学生の渡米を奨励するとともに、農村部の困窮者の海外進出をもすすめ、その案内と教育、送出に力を注ぐようになった。組織の名称が中国の故事、「苦学力行」に由来する「日本力行会」となったのは1900年（明治33年）のことであった。いわば移民教育のパイオニアであった島貫自身も海外移住に関する案内書を次々に執筆し、青年たちの海外移住熱を高めた一人であった。この移民教育は組織がおかれた東京にとどまらず、国内いたるところに通信教育という形で行われていた。会報、機関紙が有料で配布されていたのである。1908年（明治41年）の時点で国内外の会員が4,700名余、移民教育を受けて渡米したものが約2,600名だったということは特筆すべきであろう。この年を前後して、この会の移民教育も当初主な会員送出先であったアメリカに関することだけではなく、徐々に南米、特にブラジルに関する内容が多くを占めることになるのである。

後に横浜講習所の所長となる永田は1908年に渡米し、その後、アメリカで農業に従事する青年たちのリーダー的役割を果たしていた。初代会長の命を受けて国内の後進指導のために帰国したのは1914年のことであった。アメリカの日本人移民の実態、例えば「サンフランシスコでよごれた日本服を着、子供をおんぶして、手にやかんをさげてぞろぞろ歩き回り、中には四つ角で立小便するものもいた」などを目の当たりにしていた永田は、「北米の排日は非人道的であったにしても日本側も研究をして今後の海外移民の講習所を設置しなければならない」と会の後援者の一人であった新渡戸稲造を軽井沢の別荘に訪ね、訴えている。新渡戸は「それは大切なことで、もっと早くからやらねばならぬことであったが、やってくれる人がいなかった。力行会でやるのもよいが、日本移民協会ができたばかりで、有力知名の人々が顔を出しているから、表面は移民協会の仕事にして所長を君がやることにしてはどうか」と応じた(注4)。こうして横浜講習所は開設され、本格的な移民講習が、力行会でその手法を熟知していた永田らによって始められたのである。

『海外渡航者必携』

永田による、『海外渡航者必携』は縦178mm、横100mm、28ページの小冊子である。永田は

1916年（大正5年）横浜講習所の開設にともない『新渡航法』という書物を出版しているが、この『海外渡航者必携』はその簡約版である。

その内容は、一　はしがき、二　旅費の事、三　渡航者支度の事、四　故郷出發の事、五　横濱滞在の事、六　神戸長崎より乗船の事、七　乗船地變更の事、八　船中の注意、九　上陸の心得、十　在外臣民登録並に徴兵猶豫の事、十一　在外同胞の心得、十二　横濱講習所案内からなる。一のはしがきを見てみよう。

> あなたは今海外旅券の下附を得ました、近い内に出發せねばなりませぬが、洋服や其他の支度はドンナ風に致しますか、旅費は何程用意しますか、神戸や横濱で身體檢査がありますが、どうすれば合格するでせうか、船中の心得になる事や上陸の時に外國の移民官が訊問しますが、何と返事を致しますか、そんな事がよく解ツて居りますか。
>
> 此冊子はそんな事が解らずに心配になる人の相談相手になる様に書いてありますが、これ丈け讀ンだ丈では未だ外國に行く用意が十分に出來たとは申されませぬ、外國の言葉や、着物の着方、便所に行く事、寢床の用意をする事、湯に入る事、料理からお掃除、外國の病氣の事お産の事から子供の育て方、裁縫ミシンの使い方から、諸外國の事情等を日本を立つ前によく心得て置かねばならぬ事が澤山にあります。
>
> 日本移民協會の横濱講習所では外國に行く人に大切な一切の事を錢を取らずに教えて居りますから、貴君は横濱から乗船するならば船の出帆する一週間か十日前から講習所に來て講習を受けるがよい、講習所で習ツて行ツた人々は皆喜んで目的地に着いてからお禮状を送ツて來て居ります。
>
> 猶、此書物は『新渡航法』と申す物から抜き書きをしたので、新渡航法は此小冊子の外に外國に行く者の知らねばならぬ一切の事が書いてあるから、講習所に來る事の出來ぬ者は是非讀むがよい。
>
> 神戸長崎には未だ講習所が無いから、船が横濱碇泊中に横濱講習所においでなさい、何から何まで親切に教えて上げますし、紹介状などを欲しい方には何へなりとも書いて上げます(注5)。

文中のところどころにふりがなが見られる。明治以降のふりがなは出版によって不特定多数の読者を想定した文章が書かれるようになったことを示すものであり、また、そうした読者の質と量を著者の側で考慮しなければならない事情を示すものである。日本国内では1900年当時、既に小学校への就学率は男女ともに80%を超えており、1905年には95%、1910年には98%になり、

1920年には現在と同じ99%に達していた。この数字をこうした移民教育を受ける人々に当てはめてみると、このようなふりがなつきの情報であれば多くのものが解することができたと言えよう。ふりがなの効用としては(1)さまざまな読みのある漢字を著者の欲するとおり、すなわち、著者のことばを正確に読者に伝える、(2)通読を容易ならしめる、(3)漢字の読み方を知らせ、また、ことばをどのような漢字で書くべきかを教える、などがあげられるが、この場合は漢字を教えるというよりも、幅広い情報伝達が第一の目的であったと考えられる。しかし、全員がこの小冊子の中で述べられているような書物、『新渡航法』を自在に読解し得たとは言い難い。さらに、例えば、文中の「移民官」なる職にあるものが自身にとってどのような関わりを持つことになるかは実際の講習を受けてみなければわからないものもいたはずである。個人宛の手紙に始まって、このわかりやすさを追求した小冊子は、さまざまな教育的背景を持つ人々にあまねく受容されたにちがいない。講習は誰にでも開かれ、そして無料であった。さて、その講習の内容とはどのようなものだったのだろうか。

『新渡航法』

この書物は、『海外渡航者必携』に「新渡航法は此小冊子の外に外國に行く者の知らねばならぬ一切の事が書いてあるから、講習所に來る事の出來ぬ者は是非讀むがよい」と書かれているように、講習所での講話を網羅した内容になっている。その一部をここに紹介する。

1. ———— 第一編　海外渡航総論(注6)

「我日本の代表者たれ」、「膨張國民の自覚」、「世界に國境なし」、「世界に異人種なし」、「先發者なり」、「世界共通の憲法」の六項からなる。「我日本の代表者たれ」では、「足一度日本を離るれば日本人は一人一人が外交官となると同様で、日本人一人が盗人をすれば、其地方の他國人は『日本人は盗人だ』と云はれるし、之に反して日本人が一人、河に落ちた子供を救ってやれば其地方の外國人は『日本人は強い偉い』と讃めてくれる」と例え話を用いていてわかりやすい。「膨張國民の自覚」ではこの見出しからもわかるように当時の「帝国の臣民」の発想は、永田のようにキリスト教だけではなく、アメリカにおいて民主主義の洗礼を受けたものにとっても深く植えつけられたものであることがわかる。そして、受講者には何より効果的だったと思われる天照大神の御詔勅、「此土地は世々我等子孫の統治す可き國なり」が引用され、「此土地」は現代では「世界」と解釈できると説いている。「世界に國境なし」では、この発想なくして日本人は世界に発展できないとし、続く「世界に異人種なし」では「野蛮人だと云ふて馬鹿にしたり、白人だとて恐れる必要は無い、皆日本人同様だと心得萬民平等の取扱をすることが大切である」としている。残る「先發者なり」、「世界共通の憲法」では先發隊の影響は永きに及ぶことから、世界共通の善良なる気風をつくらねばならないとしている。まずは精神論からのスタートである。

2. ———— 第三編　目的地の選定(注7)

アメリカでの排日は海外を目指すものに決定が困難な選択を与えていた。この箇所では受講者の健康状態をその選択の際の決め手の一つとしてあげている。健康体のものであれば、何れの土地でも堪えられないことはないとするも、多少故障のあるものは目的地をよく考えるようにと進めている。永田は以下のように「風土気候のよき國をはじめとし、漸次不良な地方の順に」と実際に気候のよい順に国名を挙げている。

> 北米合衆国本土、南米アルゼンチン、英領加奈陀、布哇、ブラジル、墨西哥、セレベス、
> 比律賓群島、ペルー、英蘭領南洋各地

ブラジルは丁度中間に挙げてあるが、この頃には既にアメリカ・カナダ・ハワイへの移民数は制限されていたのである。不名誉な順位に挙げられている国は気候が不良というよりも、**前史**で述べたように移民が失敗に終わっている国と合致している。

また、学歴による目的地の選定は受講者にとって重要であったにちがいない。永田は「この情報は外務省の内規で公知できない」、「従って著者は断言できない」と断りながらも、力行会で旅券獲得者の支援をしてきた経験上の情報を披露している。これによると、アメリカが高等専門学校、カナダ及びハワイが中学卒業者、そしてブラジルを含む他の諸外国は小学校と書かれている。たまたま筆者が手にした『新渡航法』には、当時の持ち主の手書きなのか、この項に「学校出ハキラワルル」というインクの文字が書き込まれている。同種の案内書にもたびたび登場するが、労働条件に対するストライキを呼びかけるのが思想などを学んだ高学歴のものだったからだと思われる。

3. ————第四編　各國事情　第四項　伯剌西爾(注8)

第四編各國事情では二十八カ国の地理、言語、その他の事情などが説明されているが、これも各国に会員を送り続けた力行会のネットワークならではの箇所である。ブラジルはそのうち第四項に挙げられ、以下のように説明されている。

> 第一、米作が将来有望、伯剌西爾は南亜米利加第一の大きい國で、(中略) 土地が肥へているから農作に適當して居る。低地は有名なアマゾン河に沿つて居る地方で、全國面積の三分の一を占めて居る。土地が平かで其上肥へて居るので農作には誠に結構であるが、熱帯であるから、或は日本人には堪へられないかもしれない。気候は四季變化がないが、降雨期と乾燥期とがある、中部の方は気候が温和で流行病がないから移民には適當である。夏の平均温度は摂氏の約二十八度内外で、山地や南海岸の平均は二十三度であ

旧「国立移民収容所」(後の「神戸移住センター」)2003年8月横田撮影
建物の前には「ブラジル移民発祥の地」の石碑が立つ。現在は1階東側に「移住資料室」が整備され、2階から4階は主に芸術家の創作と交流などに利用されている。撮影日には4階で日系ブラジル人児童のための夏休み講座が開かれていた。

移民で賑わう収容所近くの店(提供:株式会社商船三井)

移民の敵、トラホームの検査(提供:株式会社商船三井)

るから、丁度我長崎に似て居る。(中略)南米各国では皆西班牙語であるが之の國に限ってポルトガル語である。

九州地方からブラジルに渡った人も多い。長崎のような気候だと真に受けて愕然としたものもあったのではないだろうか。ブラジルに渡ったものの多くが農業従事者だったことを考えると、肥えた土地というものは大きな魅力だったことだろう。また、ブラジルに関しては周辺諸国とはちがってポルトガル語が使用されていることが明記されている。

この他にも、日本からの移民の多くがさかんな農業の中でもコーヒー栽培に従事しているが、ブラジル政府が米作を奨励していること、その方法が「幼稚」で「田畑に水を入れて遣らない」ので改良の余地があり、「今、日本の農民が行って遣れば必ず成功する」としている。時を経て、上空からブラジル全域を見渡すと、整備された用水路が確認できるのは日本からの移民が多く入植した地域であることは決して偶然ではないと思われる(注9)。そして、実際にブラジルを視察した経験から、

一、伯國では小供を育てるのに楽だ
一、宏大な農業地が何程でもある
一、気候が案外に宜しい
一、日本人を歓迎する
一、労働者から漸次獨立殖民になれる

としてブラジルの紹介のページを終えている。北米での排日の気運が日本人移民の土地所有を阻み、そして、移民そのものが制限された時代に、受講者の目に飛び込んできたこの最後の五箇条は夢のような文言ではなかったか。この後も版を重ねて読み継が

れた『新渡航法』は他にも船中の心得、携帯品、衛生についても詳しく教えを説いているが、これは後続の案内書、冊子などのいわばひな型となった。永田自身が、別人が著した案内書の類を紐解くと、かつて自身が書いたものがそのまま書き記されていて驚いたが海外渡航者の利益になるのならこれを歓迎したいと述べているほどであった。

各地に広がった移民教育の「場」

さて、1916年(大正5年)にその初版が出版された『新渡航法』だが、版を重ねてその第六版(1921年)には著者の永田がこの横浜講習所との関係を絶つという記述が見られる。**日本力行会と永田稠**で設立の経緯を述べたが、名前は貸すが資金提供をしないという日本移民協会との確執があったからである。無料で教育が施されるこの講習所の運営資金は専ら永田らの奔走による寄付金によって得られていたのだ。またあるときには永田は外務省への出頭を命じられている。恐る恐る出かけてみると「移民講習所をやっていただいて感謝しておる、少々御援助をいたしたい」と通商局長から1500円の援助を受けたというエピソードも残っている(注10)。この後、永田は外務省、神奈川、兵庫、長崎の三県と交渉、その結果、望みかなって各県に海外渡航講習所が設置されることになった。次に述べる国立移民収容所(神戸)はその一つである。

国立移民収容所(神戸)

前出の永田らの尽力もあって移民教育の場は各地に広がった。神戸に国立移民収容所(後の「神戸移住センター」)が設立されたのは1928年のことである。笠戸丸による最初の大量移民がブラジルに渡ってから20年が経過していた。資料1は1928年7月25日の乗船を目指した一行が過ごした一週間の日程表である。全国各地から故郷を後にした人々が疲労回復をする間もなくこのような集中講義を受講していた。また、連日の予防注射により熱を出して寝込むものもあったという。そんな中での楽しみは食事ではなかったか。資料2の献立表には「シュチュウ」「ハイシビーフ」といったカタカナの料理名も顔を出している。

ここでの生活が生き生きと描かれているのが第一回芥川賞を受賞した石川達三の『蒼氓』である。小説という体裁をとっているものの、石川自身がブラジルに渡航した際の経験を記した『最近南米往来記』と照らし合わせてみると、主人公の男女の心模様を除くと、収容所内や船上でのエピソードのほとんどが、石川の目の前で実際に起こったことだったということがわかる。例えば『蒼氓』にも登場する、トラホームのためにこの収容所に入ることさえ許されず、行くあてもなく収容所前の坂道を降りる家族は、実際に石川が神戸で出会った家族であった。石川はこの収容所で

第九回　収容行事表　　入所　七月十八日　郵船備後丸　　退所　七月廿五日　出帆 七月廿五日午后二時

順日	月日	七曜	午前				午後				
			朝食時間	開始時間	行事	晝食	開始時間	行事	入浴	夕食	備考
1	七月十八日	水	自七時 至七時半	九時	身体検査、 配室、 講話：入所中心得、渡航支度心得	自十二時 至十二時半			自一時 至五時	自七時 至七時半	
2	同 十九日	木	仝	八時半	第一回注射、 講習：ブラジル一般事情	仝			仝	仝	
3	同 二十日	金	仝	仝	講習：語學 農牧事情	仝		署名	仝	仝	
4	同二十一日	土	仝	仝	種痘・注射（第一回未了者）、衛生講話	仝		水上署ノ鑑定	仝	仝	
5	同二十二日	日	仝	仝	講習：語學 講話：ブラジル國教	仝		荷物個数調査	仝	仝	
6	同二十三日	月	仝	仝	第二回注射、 講習： （婦人ノミ）	仝		渡航費計算 （家長及單獨渡航者ノミ）	仝	仝	
7	同二十四日	火	仝	仝	注射及種痘 （未了者ノミ）、 家長打合會代表者會議	仝			仝	仝	
8	同二十五日	水	自六時 至六時半		午前一時退所 出發	自十時 至十時半					

資料1　神戸移民収容所の一週間(1928年7月18日～7月25日)移民収容所(編)『移民収容所概要』(和歌山市民図書館移民資料室所蔵)より作成

第九回収容（備後丸）食事献立表

月日	朝食	晝食	夕食	月日	朝食	晝食	夕食
七月十八日		煮魚 野菜	牛肉 日本煮	同 二十二日	豆腐 野菜 味噌汁 巻昆布	焼魚 野菜	ハイシビーフ
同 十九日	豆腐 葱 味噌汁 福神漬	焼魚 野菜	かまぼこ 野菜	同 二十三日	油揚 菜 味噌汁 花良京	煮魚 野菜	玉子焼 野菜
同 二十日	油揚 野菜 味噌汁 切スルメ	煮魚 野菜	天婦羅 野菜	同 二十四日	薄揚 モヤシ 味噌汁 麹漬	牛肉 日本煮	焼魚 野菜
同 二十一日	薄揚 若布 味噌汁 芥子漬	シュチュウ	煮魚 焼豆腐	同 二十五日	豆腐 煮布 味噌汁 梅干	煮魚 野菜	

備考　一 本献立表は其時期によりて變更するも本表は其の一例として掲げたり　二 主食物は内地産米飯とす

資料2　移民収容所の献立表（1928年7月18日～7月25日）移民収容所（編）『移民収容所概要』（和歌山市民図書館 移民資料室 所蔵）より作成

の講習の様子を以下のように記している。

> 昼の間は毎日のようにブラジル語とかカトリック教とかを教え込まれる。夕方から後は各家族ごとに近所の渡航用品廉売所へ行って あらゆる道具を買い集める。(中略)こうして一週間が経過するとして最後の朝が来れば、一同は講堂に集まって所長の最後の訓辞を受ける。(中略)「海外渡航発展の諸君万歳!」を三唱する。そして一千の民がこれに和する。これで日本における生活は終わったのだ(注11)。

大阪商船の「栞」

さて、駆け足でブラジルを目指す人々を対象とした講習内容を紹介してみたが、多くの日本人をブラジルへと運んだ大阪商船(現・商船三井)の「栞」を当時の講習風景とともに紹介したい(資料3、写真)。『南米航路案内』は一枚刷りのリーフレットを2箇所で折ったものである。このうち携帯品に関する注意を見てみよう。女性が着用するスカートにも(袴)という苦肉の説明があり、船中では「猿股(ズロース)」を身につけるように説いている。これは当時の一般の女性が着用していた「着物に細帯」の姿が欧米の寝巻き姿を連想させるもので、船中で起こるさまざまな風紀上の紛争から女性を守るための記述であった。これにさきがけ、北米・ハワイに向かう女性たちに移民教育を行っていたキリスト教女子青年会

船内の調理場での料理講習会(提供:株式会社商船三井)

ポルトガル語教室の先生は再渡航の少年(提供:株式会社商船三井)

甲板の衛生教育風景(提供:株式会社商船三井)

（YWCA）は着物の上にもう一枚「被布」を身につけるようにと説いていたたが、この栞では紛争を目の当たりにしたのか、当時の船会社職員の方々が実利に見合う直接的な表現で乗船者を教育しようとしていたと言えるだろう。

船内では再渡航者の子供を講師にポルトガル語の教室が開かれ、女性たちは船内で洋裁を学びながらブラジルで着用する簡単服を縫い、着物に別れを告げた。上陸後の主食になるパンを焼く講習もあった。船医らは渡航者の眼病に気を配る合間を縫って（トラホームになると上陸が許されなかった）、医者のいない奥地に行くものらに対して衛生教育を施した。近親者のいない土地に行く女性たちはお産についての講義にも熱心に耳を傾けた。船上の小学校は子供たちの声で賑わい、毎日のように新聞も配布された。教室は彼らが三度の食事をとる「特別三等食堂」であり、また甲板の上であった。

南米航路案内

一．　木綿製折襟の労働服（ワイシャツ、ネクタイ不要のもの）數組、シャツ、ズボン、靴下、和服（寝巻の外不用）等。婦人は木綿製の簡單なる洋服、男兒には半ズボン、女兒には短いスカート（袴）が便利であります。

二．　婦人は必ず猿股を、兒童には腰巻を御用意さるゝ事。

三．　帽子、男は鳥打、麥藁、中折、女は不用。

四．　靴、男は兵隊靴に類似せる丈夫なもの。女は短靴（靴下は長くて脚部を露出せざるもの）

五．　蚊帳、毛布、布團（之は上陸後御使用のものです船内で之等の設備は皆取揃へて居ます）

六．　寝巻は浴衣、但し可成釦等にて胸の開かぬ様に出來たるものが宜敷。

七．　洗面器、薬罐、食器、鍼力製洋食皿、ナイフ、匙、鍋、鋸、金槌、手拭、小刀、石鹸、紙、封筒、歯磨粉、楊子、鋏、剃刀、鏡、手帳、針、糸、ペン軸、ペン先、鉛筆、其他。

八．　従来使用せし農具にて携帯便なるもの。

右の外贅澤品、米、味噌、醤油、絹物類其の他商品と認められたるもの（商品には重税を課せらる）及び凶器一切は御持参されてはいけませぬ。尚出發港又は寄港地にて巧に種々の甘言を以って衣類等を賣付くるものがありますが、これは無用の費用を増すのみで不利益ですからこれ等の勸誘に應ぜぬやう御注意下さい。

資料3　『南米航路案内』より　携帯品

おわりに

石川達三は国立収容所を「追放者のホーム」と呼び、ブラジルまでの45日間の船上生活を「人生のブランク」と称した。そのような視点も然り、しかし、移動による摩擦はまた新たなエネルギーを生み出す。この「人生のブランク」に、故郷でも、そしてブラジルでもない「場」で人々は人生のリセットを試みるかのように、老いも若きも揃って異文化に備えるスタートをきったのである。石川は

訪問者としてブラジルを訪れた。しかし、彼がときに同情の眼差しを投げかけた民は、やがて目の前に広がる新しい地で生き抜かなければならなかったのである。そこにはさまざまな「栞」があった。日本力行会の永田らが蒔いた移民教育の種は、その受講者らによって育まれ、そして彼らは、ブラジルから日本へと新たな情報発信を重ねた。後進への道しるべ―「栞」はその後も日本・ブラジルで生み出されることになったのである。

ときは21世紀を迎え、日本を新天地と目指す人々がいる。そして既に国内のあちこちに彼らの生活の一部始終があふれ始めている。その中には過去にブラジルへ渡った人々の子孫も多い。彼らに対してどのような「栞」を提供していくべきかを考えるときがきている。

〈大阪大学21世紀COEプログラム特任教員（COE）〉

---

1 ―――― 若槻泰雄・鈴木譲二　『海外移住政策試論』　福村出版　1975　pp.53－60。
2 ―――― 村山裕三　『アメリカに生きた日本人移民』　東洋経済新報社　1989　p.5。
3 ―――― 日本移民協会横浜講習所「横浜講習所より移住者宛講習案内　吉永操義殿」　日本移民協会横浜講習所　1917　全一枚（20×36cm）　実物は縦書き。原文のまま。
4 ―――― 永田稠　『力行会七十年物語』　日本力行会　1966　pp.39－40。
5 ―――― 永田稠　『海外渡航者必携』　日本移民協会横浜講習所（出版年不明）pp.1−2。
実物は縦書き。原文のまま。
6 ―――― 永田稠　『新渡航法』第六版　日本力行会　1921(初版　1916）pp.1－6。
7 ―――― 前掲、pp.20－26。
8 ―――― 同、pp.43－50。
9 ―――― クイヤバ、マナウスなど。この他、パンタナール大湿原を囲む日本人入植の農地全域（筆者による観察、1988年4月、5月）。
10 ―――― 永田稠　『力行会七十年物語』　日本力行会　1966　p.41。
11 ―――― 石川達三　『最近南米往来記』　中央公論社　1981　p.17。

【主要参考文献】

●石川達三『最近南米往来記』中央公論社 1981　●大阪商船『南米航路案内』大阪商船（出版年不明）　●永田稠『新渡航法』第六版 日本力行会 1921(初版 1916）●永田稠『海外渡航者必携』日本移民協会横浜講習所（出版年不明）●永田稠『力行会七十年物語』日本力行会 1966　●横田睦子『渡米移民の教育 ―栞で読む日本人移民社会―』大阪大学出版会 2003